

広報つばめ

Tsubame



特集

つばめの農業

今とこれから



特集 つばめの農業

燕市というところ「ものづくりのまち」「金属製品」のイメージが強いですが、お米はもちろん、多くの野菜や果物を生産しています。
今号では、誇りをもって働く農家さんと、異なる分野から農業にアプローチする人たちを紹介します。

● 打撃を受けた農業の世界

新型コロナウイルス感染症が私たちの生活に入り込んでから、随分と経ちました。

その影響は、外食産業や製造業、そして農業の分野にも大きな打撃を与えています。

日本政策金融公庫が3月に発表した農業景況調査によると、令和2年度の農業景況DIは前年度の6ポイントから大幅に悪化（▲32・4）。令和3年度の見通しも、さらに7・5ポイント低下する見込みです。

また、市が行ったアンケート（令和3年5月度）では、「新型コロナウイルスの影響があったか」として、「影響が出ている」「影響が出る可能性がある」と答えたのは全体のおよそ6割。感染症に伴う売り上げの減少、販売

量の減少による在庫の増加・余剰が挙げられており、市内外の飲食店に卸していた分の売れ行きが悪くなったことが大きな原因の一つと考えられます。

● 改めて目を向ける

一方で、農家は絶え間ない努力と工夫を重ね、消費者に変わらずおいしい農産物を届けるために日々頑張っています。また、異なる分野からも、今、農業に大きな関心が寄せられています。

農業はあまりに身近で、日頃考えることは少ないかもしれませんが、今回、農業という分野に改めて目を向けてみたいと思います。

※農業景況DI
農業における景気の判断指数。数値が低いほど「景気が悪い」と感じる経営体が多いことを示す。

(農)あぐりマイスター長所

いわの けん たかなみ よしお たかなみ とよひろ
岩野 健さん・高波 良夫さん・高波 豊浩さん



▲取材のちょうど前日、「令和3年度新潟県優良農業経営体等表彰 経営改善部門」で「新潟県知事賞」を受賞。

check

国産玉ねぎの需要は伸びています

玉ねぎは海外からの輸入が約4割。その大半は中国産です。和洋中の料理からスナック菓子までオールラウンダーであり、国産品の需要はととも高まっています。

園芸品目の中では機械化が進んでいる玉ねぎを、JAが導入した移植機やハーベスターなどをレンタルしながら生産しています。

九州佐賀や北海道などの大産地出荷の合間に出荷できるニッチな産地として新潟は位置しているの、高単価も期待できます。



最新ハーベスターを使った収穫の様子▶

01

チャレンジする農業者たち

実は市の面積の約半分を畑や田んぼが占める燕市。市内では多くの農家が、よりよい農業を求めて挑戦を続けています。

check

農作業はアプリ管理の時代に！

構成員が各々行った作業を入力して情報共有を図ります。田んぼの面積や進捗状況なども、いつでもどこでも一目で分かります。



学生応援物資にも！

帰省を自粛している大学生らへの応援物資に、小ぶりの玉ねぎを送りました。一人暮らしでも使いやすいサイズです。



▲玉ねぎは腐りにくく、ずっと保存できるのも強みです

最新施設で全国へ出荷

check



収穫された玉ねぎは、工事費1億円を超す全農にいがたの最新の出荷施設へ。乾燥から選果、出荷までの機械化が大きく進んでいます。

先進的農家集団

(農)あぐりマイスター長所

●玉ねぎ生産の先人

約15年続く農事組合法人「あぐりマイスター長所」。水稲と大豆をメインに、燕市では珍しい、玉ねぎを生産しています。

作り始めて3年ほどは小さいものしかできず、とても苦労したそうですが、一つひとつトラブルシューティングしながら栽培に取り組んだことで、栽培面積は約6倍に拡大。初めは加工用として出荷していたのが、今はその7割が生食向けとなりました。「まだまだ試行錯誤中です」と笑いながらも、確かな手応えを感じています。

失敗も含めたノウハウが蓄積されたことで、後進の農家も安心してチャレンジできるようになりました。今、米生産以外の可能性として玉ねぎは大注目です。

●ITを活用した農業

あぐりマイスター長所では、5年ほど前から、パソコンやスマホを使った現場管理ソフトを導入しています。こ



check

たゆまぬ改善でよりよい技術へ

大型トラクターや各種アタッチメント、GPS、ドローンなど、先進技術を多く導入しているアグリシップ。都度工夫を凝らしています。

昨年は、ドローンを使った直播栽培（初めから田んぼに種を蒔いて稲を育てる方法）のアタッチメントをカスタマイズ。

今年は薬剤を散布する箇所に、静電気を発生させるアタッチメントを取り付け、これにより、梨の受粉の着果率を向上させます。



金属部分で静電気を起こす▶

農業大学校の実験に協力

2年前から研究機関とも連携。手作業で行うのが一般的な梨の受粉を、特別に調合した溶液をドローンで上空から散布し、その効率化の研究を行っています。



「農家ばかり休みなく働いては年々増えてきており、農家の高齢化は無視できません。」

●高齢化の波と新規就農

「若い人たちがこれから魅力を感じて農業の世界に来てくれるような、そういう体制を少しでも作っていきたい」

●進むオートメーション
 ㈱アグリシップの持ち味は、最新鋭のマシンと技術。特に農業用ドローンにおいては、種まきから防除まで行うことで、かつてない短時間の作業を実現しています。昨年は梨の受粉の実験も。そして今年、企業と組んでオーダーメイドのドローン開発にも着手しました。

農業に変革を

㈱アグリシップ

「若い人たちがこれから魅力を感じて農業の世界に来てくれるような、そういう体制を少しでも作っていきたい」

そう話してくれたのは、代表の高波さん。「良き友であり良きライバル」である構成員たちと共に、これからも進み続けます。

「農家ばかり休みなく働いては年々増えてきており、農家の高齢化は無視できません。」

●時代に順応する

現在、従来の時期よりさらに遅く収穫できる品種の枝豆に挑戦。栽培がうまくいけば、大きなビジネスチャンスになります。

●コロナ禍での挑戦
 アスパラガス農家の宮路さん。7年前に就農したときから、枝豆も育てています。「毎年好評だったので、今年は思い切って」。コロナ禍でも作付面積を昨年の2倍に増やし、脱莢機も導入しました。

常にチャレンジ

宮路農場

「若い人たちがこれから魅力を感じて農業の世界に来てくれるような、そういう体制を少しでも作っていきたい」

そう話す佐藤代表。その下で働く小越さんは、両親は農家ではありませんでしたが、高校で外部講師をしていた佐藤さんと出会い、農業の世界に飛び込みます。新しい農業技術を見つけては、二人で積極的にチャレンジしています。

高齢化と担い手不足が問題となる中、アグリシップの活動は若手就農者の目標となることでしょう。

※脱莢機…自動でさやと茎や葉を選別する機械

早川農興
はやかわ むつひろ てるこ
早川 睦弘さん・照子さん



宮路農場
みやじ としゆき
宮路 敏幸さん



interview

難しい時代を乗り切りたい

「新型コロナの影響でお客様が減ってしまったので、ECサイトに挑戦しようと思いました。」

出店後は、関東や九州など、全国から注文がくるようになりました。注文した人から、とてもおいしかったとメールをもらったときは嬉しかったですね。

高齢なので、もう今年で終わりにしようかなと思いつつもありますが、お

客さんの『おいしかったよ、またよろしくね』の言葉に励まされ、ここまで続けてこれました。お客様たちには感謝の気持ちでいっぱいです。

これから農業は大変になっていくと思います。米は必要経費も上がってきているし。これを作ればいいという万能のものがあるわけでもない。

難しい時代ですが、頑張っていきたいです」



発送の準備の様子。「野菜ソムリエサミット」で銀賞を獲得した枝豆を全国に届けます▶

check

枝豆 Bar はじめました！

「ツバメクロスアクションズ」(7ページで紹介)のメンバーでもある宮路さん。

飲食店を通じた地元野菜のPRを市から受託したことから、今年の夏は、ほかの農家さんと手を組んで、ざるいっぱい燕市産枝豆とドリンク1杯を1000円で提供する取り組みをしています。

枝豆は鮮度が味や香りに出る野菜。9月いっぱいまで提供できるそうですので、朝もぎの鮮度のよい枝豆をぜひ、食べてみてください。



interview

周囲のおかげで今がある

「去年は飲食店関係で打撃を受けつつ、好調なスーパーや直売所で持ち直しました。今年も影響は残っていますが、周囲の人々のおかげでやっていけています。」

過去に色々な人と出会い、イベント参加や食育活動などに取り組んできたことが今を形作っていると思います。気にかけてくださる方々に本当に感謝しています」

「少ずつ変わっていく時代に順応していかなければ。失敗から得るものもある。とにかくやってみる」。宮路さんの挑戦は続きます。

新たな販路で見出す活路

早川農興

●ECサイト出店

20年以上枝豆を生産しているという早川さんは、今年から、産地直送卸通販サイト「新潟直送計画」に出店しています。コロナ禍で下落した売り上げの全てをカバーできるほどではありませんが、新たな販路として注力しています。

サイトに出品しても、必ず買手に選ばれるわけではありません。だからこそ注文がくるのがとても嬉しいのだそうです。

●コロナ後も頑張りたい

コロナの対応策として始めた取り組みですが、コロナが落ち着いてからも続けていきたいと話します。

「市場ではどうしても価格

が変動しますが、ECサイト

は金額が安定しているのが強

み。今後も積極的に活用して

いきたいですね」

02

農家じゃなくても農業が好き！

自然に触れることの価値。食から考える魅力や課題。異なる視点から農業に関係する取り組みを進める人たちを紹介しします。

（株）なごみ
なごみの水耕



check

県内初の水耕栽培×福祉作業所

なごみの水耕では、水耕栽培を通じた野菜生産とその販売、そのほかグループワークなどを通じて、就労継続支援 B 型・就労移行支援を行っています。水耕栽培によるこの形態の福祉作業所は、県内初です。

主に作られているの

は、レタスとにんにくスプラウト（発芽直後の新芽があるにんにく）。完全室内管理で、^{みずみず}瑞々しいのが特徴です。



●就労継続支援 B 型

障がいのある人が一般企業への就職が困難な場合に、雇用契約を結ばずに軽作業などの就労訓練を行うことができる福祉サービス

●就労移行支援

一般就労に必要なスキルを学ぶ福祉サービス

利用者の自信になり、将来の自立につながる

「利用者さんにとって、日々成長する野菜を見ることは、作業をする上での張り合いになっています。そして自分たちの育てた野菜を販売し、消費者の食卓に届けていく経験が彼らの自信になり、将来の自立やスキルアップにつながります。

現在販路を少しずつ増やしています。お見かけの際はぜひ一度手に取ってみてください」



なごみの水耕 副施設長 渡邊 和典さん

農業の力で

「やりがい」を得る

なごみの水耕

●障がいも強みにする

5月に開所した「なごみの水耕」では、障がいをもつ人たちが中心となって、水耕栽培による野菜の生産を行っています。利用者は、一般企業への就職に不安があったり、過去に就労で挫折経験のある人々など。そんな人たちに、農業は新しい世界を見せてくれます。

副施設長の渡邊さんによると、初めは不安に思っていた利用者も、できる作業を増やしていくことで自信をつけていくのだそう。

「水の流れる音や、常に一定に保たれた室温など、水耕栽培ならではの環境が、利用者さんの心の安定に繋がっていると感じます。また、この栽培スタイルは、利用者さんのニーズや適性に合わせて色々な作業に挑戦できることが強み。農業と福祉、組み合わせることでお互いの良さが発揮できます」

●作り手のプロになる

利用者とスタッフが和気



ツバメ クロス アクションズ
TSUBAME X ACTIONS

check

取り組みの一部を
紹介します

◎つばめうちでお店ごはん

外食控えが本格化した昨年4月上旬に立ち上げた、燕市内のテイクアウト・デリバリー情報を紹介するSNSアカウント。プロカメラマンの無償協力をはじめとして、多くの人に支えられてできたコンテンツなのだそう。



▲アカウントはこちら

◎燕の野菜を使った新商品

地場野菜を加工して、新しいカタチで皆さんにお届けします。写真はごはんにかけていただく「昆布カッパ」。来年の販売を目指しています。



大きな活動のひとつが、県観光協会主催の「NIIGATA プレミアムダイニング」燕会場での運営。地元の食材を使った料理を提供し、この地の魅力を発信します。



▲第1回時の準備の様子

「働くことの楽しさ」「やりがい」を知ってもらいたいと言います。

「農業は難しい反面、収穫の喜びや植物を育てる楽しさもあります。それらの魅力を共有していきたいですね。そして、消費者から『この野菜はおいしい』と笑顔で買ってもらえるよう、皆が作り手というプロ意識を持って取り組んでいきたいです」

食の魅力を発信

ツバメクロス
アクションズ

●農工商で食を発信する

前身は「もとまちきゅうり普及委員会」。地元のブランドきゅうりを広く知ってもらう活動から展開し、燕の食を通じた新しい魅力の発信を目指す団体として発足しました。メンバーは料理人や農家、調理器具メーカーなど。燕市ならではの横の繋がりの強さを生かしました。

活動内容はイベント企画・運営や企業と組んでの商品開発など多彩。その活動一つひとつに、多くの人が協力して

くれると、団体副代表の高畑さんは言います。

「農家さんや飲食店さんが快く商品を提供してくれたり、企業さんが自社の製品を無償で貸し出ししてくれたり、格安で販売してくれたり。多くの皆さんのおかげで活動することができています。活動を通じて、恩返ししていきたいですね」



▲「第28回燕さくらマラソン」にて、「もとまちきゅうりレモネード」のPRをしました

●コロナだからこそ動く

メンバーは飲食店経営者やその関係者が多く、この1年は経営が難しくなったところがほとんどです。

「売上げが落ちていって、こんなことをしているのだから…と悩むときもあります。でもだからこそ動いて、価値を生み出していかなければならないと思います」
現在は新商品の開発に力を入れているそう。今もいくつかの商品を試作中です。バリ

check

学生×農家で新しいアイデアを

農家と企業を繋いだのは、農学部の大学生たち。

燕は農業も盛んで栽培品目も多い一方、収穫が間に合わず規格外になってしまい、そのまま廃棄されてしまう野菜もあると知り、農家さんの意見を取り入れながら、社内で規格外野菜を販売するイベントを企画。社員にも好評で、その意思を受け継ぐ形で委員会がスタートしました。

そして、今年のインターン生たちは経済学部。新たな視点での提案が期待されます。



農家さんから連絡が来ると、メンバーが野菜を引き取りに行きます。今日は夏の味覚、枝豆です。

会社で袋詰め。



就業後、社員の皆さんが買いに来ます。人気の枝豆はあっという間に完売です！



(株)新越ワークス フードロス委員会

エスティーゼズ ◎SDGs (持続可能な開発目標)

2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。17のゴール・169のターゲットから構成されています。「食」の分野もそのひとつ。



エーション豊かな燕の食材の可能性をこれからも探り続けます。

企業で取り組む サステナブル

フードロス委員会

●金属加工会社のフードロス
金属加工メーカー「(株)新越ワークス」では、今年5月、「フードロス委員会」を立ち上げました。サークル活動のような形式で運営され、実り過ぎて農家に対応できなかった野菜を引き取り、格安で社内販売しています。

「忙しくて収穫できなかった野菜はそのまま廃棄されてしまいます。そういったことを少しでも減らそうという取り組みです」
売り上げは全額農家に。農家は商品を廃棄せずに見、社員も格安で新鮮な野菜を手に入れます。

●SDGs 向き合う

きっかけは、SDGs (持続可能な開発目標) への積極的参加という会社方針でした。「普段の業務の中でSDGsに値するものを探すのではなく、全く一からの取り組みをしよう。それが、会社とは

まったく違うジャンルのフードロスでした」

委員会立ち上げのヒントとなったのは、昨冬に会社にインターンに来ていた大学生たち。燕の農業について調べ、提案してくれたのだそう。

まだ走り出したばかりのこの活動。やりとりする農家さんを増やしたり、近くの会社の人も買えるシステムを作るなど、展望は広がります。

「続けることが大切なので、まずは軌道にのせられるよう頑張ります。調理器具も作っているの、いつの日か業務に繋がることもあるかもしれません。今はそこまで考えていません。サークル活動なので、とにかく楽しくやっていく。これが一番ですね」

これからの農業

●無人トラクターも

すぐそこ。

今回の取材を通し、予想をはるかに超えてIT化が進んでいることが分かりました。農家の努力を後押ししてくれる機械や技術たちは、今後さらに重要になっていくはず。

03

つばめの農業のこれから

農業を取り巻く環境は刻々と変化しています。今後、燕の農業はどうなっていくのでしょうか。



燕市が打ち出す新型コロナウイルス感染症対策の一つ、「つばめ"食べて"応援キャンペーン」を開催中。

対象となる燕市産農産物を購入してシールを集めて応募すると、抽選で市内の農産物などの賞品が当たります。

この機会に、ぜひ燕市産の新鮮でおいしい野菜を食べてみませんか?

【キャンペーン期間】

令和3年10月31日(日)まで



▲シール見本

※賞品やキャンペーンの詳細については、市ホームページまたは「広報つばめ8月号」をご覧ください。

〒燕市農業まつり推進協議会事務局

(農政課 農政企画係)

☎ 0256・77・8242



踏み出せ! 農業! スタートアップ事業

若い農業者を育成するため、農業を始めるために必要な研修の受講や農地の取得にかかる経費の一部を支援します。

申請の際は、事業の計画段階で農政課までご相談ください。

〒農政課 生産振興係

☎ 0256・77・8245



interview

これからは楽しみで仕方ない

「コロナ禍では、特に米への影響が大きかったですね。それでも、新潟県は今後も米が主流であり続けると思います。その中で、玉ねぎなど米に替わる別の一手を打てる準備をしておくことがとても大切だと感じています。」

正直、10年後どうなっているかは私も読めません。他の産地の状況、進む農業の機械化、買い手のライフスタイルの変化。要因はたくさんあります。

だからこそ、燕市の農業がどう変化していくのか、楽しみで仕方ないですね」



JA 越後中央 営農部 営農企画課 係長 遠山 哲志さん

interview

燕市はチャレンジする人を応援します

「市では、米だけではなく収益性の高い園芸作物を推進していくことで、『儲かる農業』を目指しています。」

また、個々の農家の皆さんだけでなく、さまざまな異業種団体や企業などでも、新たな取り組みが進んでいるのです。

一方で担い手不足も課題になっており、市では今年度、若手の新規就農者などへの支援として『踏み出せ! 農業! スタートアップ事業』を始めています。

皆さん、ぜひ燕市で農業にチャレンジしてみませんか」



燕市 産業振興部 部長 遠藤 一真

過去、燕市で大型ロケを敢行した日曜劇場「下町ロケット」のように、無人トラクターやコンバインが現実に田んぼを走る日は、すぐそこまで来ています。

●おいしい農産物に感謝するSDGsやコロナ禍による生活様式の多様化などもあり、農業を取り巻く環境は更に大きく変化していきます。異業種からのアプローチもどんどん進むでしょう。

農業は農業者だけのものではありません。私たちの食を支えてくれている農業は私たち全員のもです。安全・安心でおいしい農産物を当たり前のように食べられる毎日に感謝したいと思います。